ねくら

名無しの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ねくら

【Ｎコード】
Ｎ７２５５Ｚ

【作者名】
名無しの

【あらすじ】
夏休みが明け、様変わりしたクラスメイトと相反して、負の観念に憑かれた少年、霧崎刑は、突然襲ってくる頭痛に悩まされながら、周りと噛み合ない毎日を怠惰に過ごしていた。彼は永々とも思える時間を、自身の過去から逃げる様に、他愛も無い空想に費やしていた。文化祭が近づき、活気付くクラスであったが、相変わらず校内で嫌われている存在の少年には、居場所などあるはずも無かった。居心地の悪さを感じた少年は、いつもの様に授業を抜け出し、下らない妄想に耽ようと古びた資料室へ向かう。そこで少年は、一人の

少女に出会う……。

終わりの少年

《ねくら》

無かった。
僕には何もなかった。
僕は笑わなかった。
僕は泣かなかった。
僕は悲しまなかった
僕は楽しくなかった。
僕は嬉しくなかった。
僕は憐れまなかった。
僕は悔しくなかった。
たくさん持ってないものがあったから。
酷いことをしても。
酷いことをされても。
何も思わなかった。
何も感じなかった。
僕には表情が無い。
僕にはココロがない。
僕には何も無い。
僕は空っぽだ。
虚しい。
僕は生きてるのか。
僕は死んでいるのだろう。
何も感じないから。
なにも見えないから。
ここはとても暗くて、寒い。
ここには何もないし、終わりがない。

何時まで経っても終わらない。
何処まで行っても終わらない。
一生続くのだろう。
僕は逃げられない。
これが僕の全てだ。
この暗闇が。
ただそれだけが。
僕は欲しい。
ココロが欲しい。
あの子の様な。
暖かくて優しい。
ココロが欲しい。
僕には無いから。
僕は持っていないから。
だから、僕にはあの子が必要だった。

ロープ

絶望的な痛みの波は、去っていった。
だけど、未だ、耳鳴りと頭痛が酷い。
神経は鈍り、頭はまるで鉛の塊の様に重たい。
この痛みは、吐き気すら催す痛みだ。
それに、全身が、震えている。
視界は真っ暗だ。
呼吸はだいぶ落ち着いたけど、まだ荒い。
今回は、本当に、運が無かった。
まさか、このタイミングであれが来るとは、思いもしなかった。
だから、なんの準備もしていなかった。
それでも、この失敗は、完璧に、僕のミスだ。
全く、毎回毎回こうも失敗ばかりしているとさすがに嫌気がさしてくる。
こうまで失敗が積み重なると、もう、自分の弱さに只ただ辟易するしかない。
……。
……まぁ、でも、こうやって繰り返していれば、何時かは、成功する時が来るだろう。
今のところ、僕はそう、信じている。
「ハハハ、失敗かァ、残念だったナァ」
「……また、お前か」
「おいオイ、または無いだロ？」
「……お前は、何時も僕が失敗すると、出てくるんだな」
「そうダナ、それが、俺の役目だしナ」
「嫌なヤツだな」

「それもマタ、酷い言いぐさだナ」
「だって、そうだろ、僕が失敗した時ばかり出てくるから」
「まァ、そう焦るなョ。俺としちゃ、お前が何時も失敗してくれた方が、色々と、都合がいいんダからヨ」
「いつも、そう言うな」
「俺の立場からだト、そう言った見解になるんだョ……まぁ、それにしても、お前もなかなかに懲りないヤツだナ。先週も失敗したシ、先々週も失敗したじゃねェカ。まったく、オレもつくづくお前には手を焼かされるョ」
「お前が、邪魔したのか？」
「ン、それは、違うナ。俺は何もしていなイ。大体、俺はよっぽどの事が無いト、何もしなイ」
「それじゃ、僕自身が、自分で？」
「マァ、そう言うこったナァ」
「……全く、どうしようもない恥さらしだね。これじゃまるで生きながらにして恥を晒している様なものじゃないか」
「まァ、お前には恥をさらせる程の人間関係は無いけどナァ」
「……ああ、それもそうだな。僕は人間が嫌いだからね」
「オ前も一応、人間だけどなァ」
「あぁ、そうだ、僕は人間だ。だから僕は、僕が嫌いだ」
「ハハハ、そう、それでいいんダ。俺もお前も、随分と嫌われてる存在だからナァ。それが自然の成り行きってヤツダ。俺たちハ孤独に囲まれてるからナぁ。全ク、嬉しいよナァ」
「随分と、物寂しい人生だな」
「寂しいねェ、まァ、寂しさってもんハ、人間が怖がルもんだよナァ。人間かァ、人間ネぇ、でもナァ、俺たちにとってはコレが普通なんだョなァ。常識ってやつダ。俺モお前も、つまり世ノ中の一般から言っテ、アまり普通ってヤツの部類に入らねェんだョなァ。そうだナ、つまり俺たちは結構、例外的な存在って訳ダなァ。どうだァ、嬉しいカ？」

「……」
「ハハハ、そんなにヨロこんでもらえると、俺達もウレしいヨナぁ」
「……もういい、もう、消えてくれ」
「マぁ、そう固イ事を言うなヨ。言われなクテモ、俺ハもうすぐ消エるんだからヨぉ……なァ、俺達が必要になったら、いつでも呼んでクレョ。俺はお前が得意な事は苦手だけどナァ、お前の苦手な事は大体得意だからョォ」
「……僕は忙しいんだ。僕は自分のやった事の後片付けをしなくちゃいけないからな。後始末をしないと。だから、お前は、早く消えるべきなんだよ」
「ハハ、後始末カ、そうだよナァ、後始末は面倒だよナァ、何にせヨ、自分のした事の始末ってモンはよォ……ハハハ。わかったヨ、俺ハ、もう、消える、けどナ、……最後に一ツ、イイか？」
「……」
「ハハハ、お前がさァ、こういう事すんのハ、俺にとってあんまりメリットがねェんだけどョォ。まァ、もしもの時ハ、そん時に考えるとしテ。こりャ俺からのアドバイスだがよォ、今度同じ方法でやるときはョ、もっと、丈夫ナ縄、用意しとくベキだよナァ」

溜め息すら出ない。
ただ僕は、暗い天井を見上げるばかりだ。
世の中に生きる事ほど辛い事はあるか？
死ぬのは一瞬で、生きるのは一生の苦しみ。
本当に？
本当にそうか？
案外、死んでしまうより、生き続ける方が楽なのかもしれない。
そうだとしたら、僕は――――

一般的な高校生の登校風景

ピー、ピー、ピー、ピー、ピー
鼓膜に土足で侵入してくる単調で不快な電子音。
……あぁ……いつもコレだ……うるさいな……もう少し寝かせ

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピ――――――――――――――

音はいよいよ僕の残りわずかとなってしまった脳みそ（蟹味噌同然）を叩き起こす程にやかましくなってきた。
……分かったよ、今日のところは僕の負けを認めよう。
仕方がないので、気怠く目蓋をオープンして目覚ましのスイッチを握りこぶしで叩き切る。
…………また新しいの買わないと。
まったく、どうしてなのだろうか？
どうして、また、朝がくるんだ？
僕はただ、ずっと眠っていたいだけなのに。
そして、叶うならば、二度と目を覚ましたくないだけなのに、なぜ夜が終わってしまう？
まったく、嫌な朝だ。
否、それはなにも今日に限った事ではない。
一年中年中無休で平均的に僕の迎える朝は嫌な朝だ。
何が嫌か？
朝の日差しが嫌だ澄み切った空気が嫌だ聞きたくもないのに聞こえてくる鳥の呑気な鳴き声が嫌だあの意識がはっきりとしないぬるま湯に漬かっているような惚けた自分が嫌だだあと人　　間がキラ

イだきりがない無いのでここら辺で止めておく。
詰まるところ嫌なモノは嫌って事。それが言いたかった。
だらだらと立ち上がり、洗面所に向かう。
我が家の洗面所には鏡という恐ろしい物体は、無い。
正確に言うと、前はあったが今は無い。
高校に入った時、思春期特有の若気の至りで木っ端のミジンコになってしまった（トンカチで叩き割ってしまった）からだ。
あの時はアニ（仮）と初めて本気で喧嘩したな。
あれ、初めてじゃなかったっけ？　いや、でもあれは僕が初めて――

何て昔の思いでに浸っている暇は、あまり無い。
顔を洗い、歯を磨き、髪型はセットのしようが無い程の簾仕様なので、適当に分けるしか施しようが無い。
朝ご飯は勿論用意されている訳が無いので、胃の中にひたすら水道水を流し込み満たし、空想でモーニングセットを作り上げ、自らの体を欺き、我慢するしかない。
パジャマ代わりのワイシャツを脱ぎ捨て、パンツ一丁の僕は、ソファに無惨に脱ぎ捨てられていた制服のズボンを履き、クローゼットから新しい長袖のワイシャツを取り出す。
僕はどれだけ暑くても絶対に長袖しか着ないのだ。と、言うのは嘘で単に半袖を所持していないだけ。
散らかり放題のリビングルームにはあまり座れるスペースが無い。というかこちらがどんなに座りたいと切望しても、座れない。
仕方がないのでソファ（普通一般に言うやつではない）に体育座りをして、リモコンという文明の利器を使いテレビジョンのスイッチを入れる。
我が家の時代に取り残されたアナログなテレビの画面が、だんだんと人の形の像を結び始める。
何か面白いニュースはないか、と数分間色々とチャンネルを変えてみたが、一昨日に起きたお偉い人の失言を何度も同じ様なフレー

ズを用いて揚げ足を取るのに夢中な報道ばかりで、どれもこれも似たり寄ったりの気の抜けたものばかりだ。つまり、目星しいものは……無い模様。

画面から目を離し、しばしば外の長閑な風景に目を移す。

目の保養を行いつつ、いつも通り頭の中で暗闇に向かって話しかける。

殺人事件は毎日何処かで起きているし、政治家の失言や汚職だって最近ニュースで取り上げられる様になった訳ではない。なにせ、僕らが生きる素晴らしきこのご時世は子が親を殺すのが珍しい事ではないのだから。僕ら視聴者も他人面で毎日毎日そんな血なまぐさい話を画面越しに見聞きしているし、僕らの感覚が麻痺するのも無理からぬことである、と思いたい。

再び画面に目を向ける。

最近逮捕された殺人犯について、逮捕前はどんな様子だったかを、近所に住んでいる住民にリポーターがインタビューを試みている場面であった。

インタビューされた中年の女性は「まさかあの子があんな事をするなんて、思わなかったわ」とか「私が挨拶したらちゃんと返してくる、いい子だったのよ」なんてお決まりの返答をやや興奮気味に鼻息荒く語っていた。このおばさんは至極まともだ。ビィコーズゥ、少なくともこのおばさんはインタビュー中に顔の筋肉をほころばせてないから。たまにいる言葉と表情が一致しない奴。うすら笑いを浮かべながら「かわいそうだ」とか「信じられない」だの「絶対に許せない」とか言ってるヤツらだ。あいつらは一体どんな心境でものを言っているのだろうか。……彼らは目も当てられない様な悲惨な事件を口では残虐だの非道だのと言いつつも、胸の内で実際は心底そんな様な事件を楽しんでいるのだろうか。やはり所詮、他人事でしかないのだろう。結局人間とはそういった生き物だ。どんなに知識を貯えて倫理的に振る舞う真似事をしても、結局は自分の身に起こっていないことに対してはいつだって花見でもしている気分で

しかない。人の不幸は蜜の味とは良く言ったものだ。誰だって自分より不幸な人間を見れば表では同情の意思を示しつつも裏では心の底から蔑み自分より下の人間が居る事実に対して安堵している。そのくせ自分は真人間であるだとか悪い事はしてはいけないだのと悪怯れも無く平然と言う、そしてあまつさえ自分の事は棚に上げたまま放置しておいて、他人の悪所をわざわざ手間暇かけてまで見つけ出し、それを相手が再起不能になるまで糾弾する、しかし当事者である本人は当然の事をしたまでと言わんばかりに、正義の味方面である。まったくもってこういうのが人間という生物なのだから、いい加減ぼくは人間という仕事を任意退職したくなる。……まぁ、しかし、そういうのは訳知り顔で勝手に不特定多数の人に対しての想像をしている僕が一番当てはまりそうなんだけれど……。いや、しかし、僕には未だ偽善者の皮を被っていられるだけの理性がある、とは、まだ思っている。

なんて事を一人悠長に思いつつ、ふと時計に目をやる。

時計の針は既に八時十分過を指していた。

……うーん、ヤバイ。

なにを隠そうボクの職業は学生だ。

それも、高校生だ。

世間一般かどうか知らないけど長く辛い人生においてなかなかに甘酸っぱいであろうと期待される時期、そう、高校生。１０年後に思い起こしてみるとあの頃に戻りたいと言う輩の絶えない、あの、高校生。思っていて非常に悲しくなっているこの僕も、一応、高校生。だが決して義務教育ではないのも、それまた、高校生。

だから、僕は焦らない。

ゆっくり余裕を持って無駄にかさばる重たい教科書を学校指定のバックに詰め込んでいく。

大人の男にはゆとりある余裕が大切なのだ。高校生が大人か子供かは各々の主観に任せるとして。

やっとのことで家を出る。

勿論、元気良く「行ってきまーす」なんてアットホームな言葉は一言も発しない。
「……」
無言の旅立ち、自称現代っ子とはそういうものだ。
強い日差しを全身に受け、億劫ながら、とりあえず自転車を違法駐輪している公園まで歩く。
途中、近所の奥様方が僕の方を指差し、何かヒソヒソと話しているのを偶然、目撃。
間違っても良い意味で噂されているのではないと分かってはいるが、あえて爽やかスマイルを逆らせて会釈でもしてやろうぜ、と悪魔が僕の耳元で囁いてきたので、なんとか自分の手の平としりとりをして堪えてみる。
おっとう、おっかぁ、おめぇの息子は我慢強い子に育っただよ（日本昔話風）。
世間の風当たりを気にしている様では真の解脱者にはなれないと誰かが言っていた様な気がする。別に僕は別次元に行きたいとは思っていないけど。
自分の手の平にしりとりで三回負けたところで、ようやく公園に到着。
公園の草むらに隠した（？）自転車は、今日も撤去されていなかった。
その代わり、今日はカゴの中に溢れんばかりの空き缶が入っていた。未だ中身が少し入っているのも多数あった。
仕方が無いので、自転車に前蹴りをかまし、カゴの中の空き缶を地面にぶちまける。
昨日は生ゴミで、一昨日はネバネバした成人コミックスだった。
それで今日は空き缶か。
……。
今日はなかなかに、運が良い日かもしれない。
そう思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7255z/

ねくら

2011年12月24日02時01分発行